



Key Question 1

よい結果を導く 質的分析のポイントは？

「質的研究って、何度勉強してもわかった気がしない。理解しようにも、説明に使われる言葉そのものが抽象的で難しく、途中で嫌になってしまう。質的研究ってどうしてこんなにわかりにくいのか？」——質的研究論文を読んだ人がつい口にしてしまう、こうした感想や疑問（むしろ憤り？）を時おり耳にします。質的研究が、少なからず人々にわかりにくく難しい印象を与えることは、どうやら疑いようのないことのようにです。ではいったい、質的研究のどんな点が、こうした印象につながっているのでしょうか？

わかりにくさや難しさの源泉は、質的データの処理過程の特徴にあると、私は常々思っています。質的データを収集するための方法については、多少の相違はあっても人々のあいだに共通理解を生みやすく、それほど難しい印象を与えることはないと思います。しかし、得られたデータをどのように分析し、解釈するかという点になると、説明に用いられる言葉が急に専門性を帯び、それぞれの研究方法論のルーツとなる学問分野に通じていないと理解しがたい内容だと感じられるのではないのでしょうか。

現象学的アプローチやグラウンデッド・セオリー・アプローチ、エスノグラフィーなど、質的研究に用いられるさまざまな方法論に

は、その方法論を導いた学問なり理論なりが存在します。なるほど、それらの学問や理論は、それら自身が1つの学究対象であって、複雑で難解な知識体系を基盤としているため、簡単に理解が得られるものとは言えません。多くの人が質的研究に困難を覚えるのは、こうした質的研究の基礎となる知識体系の複雑さ・難解さにあると考えるかもしれません。が、実のところ問題の核心はもっとシンプルなものであり、そうした知識体系に関与する手前の過程にある、と言ったら驚きでしょうか。

質的研究の方法論を解説する文献の多さに比べ、質的データの処理が実際どのように行なわれるかを著した文献の少なさは特筆すべきものがあります。それだけに、質的データの処理過程は秘密のベールに覆われており、実施したことのない人には立ち入りにくい印象を、実施したことのある人には本当にあの仕方よかったのかという自信喪失感を、それぞれ与えているのかもしれません。

質的研究のわかりにくさをめぐる問題の核心に迫るため、これからサンデロウスキー先生が記した論文を手がかりに、質的分析の実際を明らかにする旅に出かけたいと思います。

A graphic showing a key on the left and a lock on the right, both in a light gray color. The key is positioned as if it is about to be inserted into the lock.

Key Question への
回答 **1**

質的データの「分析」と「解釈」の違いを
意識して進めることが、よい結果を導く鍵
です

質的分析とは何か、そして、 どのように始めるのか？¹⁾

質的研究で誰もが直面する最もやっかいな問題は、収集したデータをどのように処理していくかということであろう。一度の調査からでも、どれだけ多くのデータが得られるのかということや、そして、どのようなデータであれ、研究者の意思と努力がなければ、そこからいかなるテーマも、カテゴリーも、理論も、あるいは分析に重要な他の何もかも生じてこないことを、研究者はこの問題に直面したとき（多くの場合、初めて）痛感する。データは何度も繰り返し吟味されなければならないが、そのデータの言葉の多さに圧倒されてしまい、最近では、テキストデータをコンピュータで処理しようとする研究者が増えている。このようにコンピュータプログラムを用いることで、データ分析につきものの面倒な作業を避けることができると思われているようだが、それは誤りである。

確かに、細かく分けたテキストの文言にラベルやコードを付けたり、そのコード化した文言を検索し整理する作業にソフトウェアを用いることはできる（Tesch, 1990）。しかし、テキストデータをどのように分け、その分けた文言にどのようなコードを付けるかという決定はソフトウェアにはできない。つまり、データが何を意味するのかを決めるのは研究者であって、ソフトウェアではない。いかに優れたソフトウェアが開発されようとも、研究者の出番がなくなることはない。研究者は、社会学者のミルズが言うように、「知的な職人芸（intellectual craftsmanship）」（Mills, 1959/1978, p.195）とも言うべき深い洞察力や着想の技能を磨かなければならず、それなくしては、いかにコンピュータを駆使しても、価値ある質的研究の結果は期待できない。

質的分析のプロセスで研究者が最も困惑するのが、まさにその分析を始め

1) Sandelowski, M. (1995). Qualitative analysis: What it is and how to begin. *Research in Nursing & Health*, 18, 371-375. (©1995 John Wiley & Sons, Inc.)

る時であることはほぼ間違いない。質的データ分析の実際の作業については、最近になってようやく研究方法論の授業や教科書で、さまざまな分析に対応できる形で取り扱われるようになったばかりである（例えば、Miles & Huberman, 1994; Patton, 1990; Strauss & Corbin, 1990; Tesch, 1990; Van Manen, 1990）。そこで、本稿では、インタビューデータの分析を始める最初のアプローチについて述べてみようと思う。つまり、研究者がデータを「見る（look at：注意を向けてよく見る）」という分析のまさに一番初めの段階を扱うことにする。それは、後の段階で研究者がそのデータの中に何を「探す（look for：求めて見る）」べきかを、しっかりと判断する作業である。この後半の段階、すなわち「探す」段階で、データから何かを見出すことができれば、研究の質的な成果を十分に挙げることができよう。

ここで私が述べようとしているのは、質的分析を始めるにあたって参考になるいくつかの示唆に過ぎない。質的研究の技能を高め、その専門知識を磨くことは、研究者としての美的な要求を満たし、かつ研究の目的に合った研究手法を試みること、そして、その研究手法を質的作業のルールにも精神にも反しない方法でより精緻にしていくことを意味する。質的作業のルールに反するものとしては、中途半端な分析や、研究中の現象について根拠のない推測に強く（そして、気づかないうちに）こだわってしまうことが、最も多く、かつ深刻なものである。また、質的作業の精神に反するものとしては、研究を既成のマニュアル通りに行なうだけで、自分の頭で何も考えようとしないことが、それに相当する。

■ 準備や解釈とは異なるものとしてのデータ分析 ■

質的研究では、データの収集、準備、分析、そして、解釈というプロセスが、時間的にも内容的にも重なり合っている。この研究プロセスの同時性、反復性、そして、創発的な性質が、質的研究を特徴づけており、量的研究の直線性、つまり、作業手順が固定化しているプロセスとは対照的なものとして強調されている。質的研究では、多くの場合、データ収集の第1段階が終了した時点から分析が始まっており、この予備的な分析の結果から、それ以降のデータ収集の方向性が決まってくる。理論的サンプリングのような手法が、データの収集と分析の両方に有効な方略と見なされることがあり、さらに、質的手法で

は、データの準備と分析との間、そして、データの分析と解釈との間を明確に区別する線を引くことができない。それは、データ準備のプロセスそのものが分析に結びついたり、また、分析の枠組みが解釈のベースとなることがよくあるからである。特に、研究者の印象や内省が大きく影響する質的手法では、分析と解釈のプロセスを分けることは難しい。

このように、質的研究においては、データの収集から解釈に至るプロセスに明確な区分がなく、重なり合っている。しかし、よい質的結果とは何かを理解するためには、まだ分析の段階にある未完成の結果と完全に解釈の段階まで終了した結果とを区別すること、ある方法を最初に意図した結果を導き出すのに使用することと他の目的にその方法を使用することの違いをはっきりと認めることがきわめて重要である。

データの準備と分析という2つのプロセスは、ともにデータを解釈可能な形に(再)表現し、そして(再)構成する作業だと見なされている。ここで「再」をカッコに入れたのは、データが繰り返し連続して形を変えていくことを強調するためである。つまり、研究参加者の直接の語りから、それを文字に起こした文章、そして、さまざまな「意味の単位」に分割された文言へと、データは形を変えていく (Tesch, 1990)。

質的分析とは知を生み出していく手段であるが、その手法には何らかの演繹的なシステム、もしくはデータから引き出されるシステムによって、データの要素が分類されることがある。分析とは、データを完全に分けていくこと、つまり、データを基本要素に分解することである。よく用いられる分析方法の例としては、さまざまな種類の内容分析、比較分析、そして現象学的テーマ分析があり、このような手法により研究者は新しい方法でデータを見ていくことができる。

質的分析とは対照的に、質的解釈は生み出された知である。その知は分析の最終結果であり、そこで研究者は分析されたデータを何か新しいものが生み出される方法で解釈していく。その新しいものとは、データそのものとは異なるが、しかし、同時にデータに忠実なものである。

分析はデータを分けていくプロセスであるのに対し、解釈はデータから何か新しいものをつくり上げていくプロセスである。分析により研究者がデータを新しい視点から見ることができるのとちょうど同じように、研究者によって

なされた解釈によって、他の研究者がその現象を新しい視点で見ることができ、質的解釈によって、他人の経験をまるで自分が体験しているかのように感じることがあるが、それは、身近なものをさらに身近にしたり（よく言われるような気づきのショックを引き出したり）、身近なものに距離を置いてみたり、また隠れていたものを暴き出すことによって可能となる（Patton, 1990）。

したがって、カテゴリーとサブカテゴリーのみ、もしくはテーマとサブテーマのみがリストアップされている研究報告書は、解釈の段階までには至っていないことになる（もっとも、こういったリストはある種の予備的な記述だと考えられるが）。研究者は、理論構築以外の目的、つまり、道具としての分類法や項目をつくり出すことが目的で、グラウンデッド・セオリーや現象学に関連する技法やそれに特有の技法を用いたり、異なる技法を組み合わせる用いことがある。しかし、現象学やグラウンデッド・セオリーが意図された解釈の結果とすれば、その作業は未完成の状態であり（つまり、まだ分析の段階にあり）、言ってみれば、解釈されていない統計的検定をコンピュータ処理した結果として提示するようなものである。

分析についてよくある誤解は、質的作業のどの結果にも、調査で得られたデータがすべて含まれていなければならないということである。この誤解から、表面的なデータの解釈（よくてもある種の質的調査に似ているだけのデータ解釈）がなされることもあろう。実際に、研究者がすべてのデータを説明する、つまり、そこにあるものを分類しなければならないのは、分析の最初の段階においてのみである。この説明が完了して初めて、研究者には追究することができるさまざまな方向性が見え、その方向の1つひとつを分析の対象としていくことができよう。

以前、私は不妊のカップルが子をもうけ、育てる、親への移行期について共同研究を行なった。その研究成果に関するさまざまな報告では、複数のインタビュー、アンケート調査、観察を含む1つのデータセットからの詳細な切り口、もしくは異なる分析の方向性を示した。これらのいずれにも、収集されたデータのすべてが含まれていたわけではない。むしろ、その1つひとつには、それぞれの分析に関連するデータのみが含まれていた。異なる分析の方向による研究（1つの研究プロジェクト、もしくは横断的な研究プロジェクト）からの解釈的な結果は、より大きな全体へと統合され、複雑な現象についての新し

い見方を与える可能性を有している。

■ データの準備 ■

データ分析、すなわち、質的データを細かな要素に分けていく作業には、研究の目的とその意図された結果が達成される方法でデータが準備されることが求められる。今日、インタビューデータの準備として一般的な方法が逐語録の作成であり、それはインタビューの要素を選択的に保存する1つの手法である。分析には、語りの中身を強調するにせよ、話しぶりを強調するにせよ、研究者は概して、インタビューで語られた言葉を一言一句そのままの形で残したいと考えている。さらに、語りの他にも口から発せられた笑い声やため息など、そして、ジェスチャーや身体の動きなどの言語外の要素も書き記しておきたいようだ。

文字起こしのガイドラインとしてどのような言語理論や言葉選択の原理を用いようと、逐語録は、たとえそのデータが実際のインタビューをそのまま忠実に再現するものではないとしても、実質的には分析される生のデータとなる。逐語録はインタビューを再構成するという意味において、その「生」のデータには部分的ではあるが手が加わっており、すでに生ではないのである (Sandelowski, 1994; cf. Key Question 6)。

データの準備は、データが分析に適した形へと変えられていく段階であり、質的研究のプロセスにおいて他の段階とは区別される。しかしこの準備の段階でも、研究者が逐語録をインタビュー録音に突き合わせてチェックすることで、分析の第1段階が始まっている。実際、このチェックのプロセスで、研究者が初めてインタビュー全体の内容を理解することが多い。インタビューを行なったのはその研究者本人なのだが、この段階で、語られた内容を初めて耳にすることも珍しくはない。このチェック段階で、なんとなく重要だと感じることで、研究者が鍵となるフレーズを選び出すことがよくある。またこの時に、テキストの内容に関連しているいろいろと思いついたことを、忘れないように逐語録の余白に書きとめておくこともある。

■ データ分析 ■

このようにデータの分析は、その準備（逐語録の作成やチェック）の段階で

既に始まっているのである。しかし正式には、データ分析は、研究者が分析の対象となる「生」のデータとして逐語録を手にしてから始まるということができよう。予備的な分析は、それぞれの逐語録の全体を理解し、データを説明するための一貫した手法をつくる努力によってさらに続いていく。

全体の意味をつかむ

質的データ分析を目指すアプローチでは、研究者はインタビュー間の比較をする前に、まず個々のインタビューについてその内容を理解しなければならない。研究者はインタビューで語られている内容を十分に理解するまで、インタビューの逐語録を1つひとつ、必要なら何度も繰り返し読むことが望ましい。ただしこの段階では、分析的に読み進まなければならないというプレッシャーは感じなくともよい。テキストを読むだけでも研究者は必ず一歩前へと進み、テキストと向き合った後には新しい考えが生じてくる。このような考えは、その分野の文献や他の示唆的な文章を読んで同時に浮かんでくる他のアイデアと一緒にあって、理論的、内省的なメモの記録として分析のためのデータともなる。

自由回答形式で指示がほとんどない長いインタビューでも、ほんのわずかながら鍵となるストーリーラインが存在する。研究者はこのストーリーラインを簡単にまとめ、インタビューの重要な点だと感じたことを簡単に記しておくことが大切だ。このことが、そのインタビューの実質的、理論的、推論的、非推論的な特徴についての考察を組み合わせることにともなる。このまとめでは、データから離れないように注意しながら短く言い換え、より抽象的な表現にしたり、インタビューのナラティブ構造や相互作用的な特徴についてのコメントを記しておくといよい。

しかし、最初から、既定の基準にしたがってストーリーラインをまとめなければならないだとか、ある一定の方法にしたがってまとめなければならないといった心配をする必要はない。最高の質的研究と見なされるものには、必ずと言ってよいほど創造性と想像性が見出せるものだが、それを妨げる要因の1つは、早い段階で既存のルール通りに処理してしまうマニュアル化した思考活動である。それは、このプロセスで自由に考え、自分の言葉で走り書きしたことが、他人に理解されないのではないかという恐れからくる。この段階で

は、走り書きは、それを書いた本人以外の誰にも理解される必要はない。形式や評価を気にし過ぎると、自分自身のアイデアを損なってしまう。

さらに、この段階では「言葉の詰め込み（言い過ぎ）」(Miles & Huberman, 1984, p.56)、つまり、面倒な割に分析にはそれほど効果が期待できない余計な言葉避けるように注意する必要がある。言葉の詰め込みは、大学1年生がよくやるような、教科書や参考書のいたるところにマーカーで印をつけるようなものであり、理解の促進にはあまり役に立たない手法である。言葉の詰め込みが生じるのは、一行一行をバラバラに見てコード化を行なうからである。つまり、全体の意味をとらえないで、あるいは、取り扱うインタビューデータへの全体的な方向づけもなく分析の方向性も定まらないままで、データの1つひとつの文にラベルを付けていくからである。

テキストの一文一文は、それ自身にはまったく意味がないか（よくある理由として、ページ構成の関係で、もとの長い発話を複数の短い文に分けなくてはならない場合があることや、文の意味は前後のセンテンスに左右される場合が多いことがある）、もしくは、1つのラベルではカバーできないほど多くの意味をもっているかのどちらかである。こういったコード化は、分析的にも文脈的にもうわべだけのもので内容がない。そして、次から次へと考えなければならぬ言葉が現れて来るが、分析には役立たないものが多く、このようなコード化は研究者を疲れさせ、ストレスを与えるだけである。Teschが言うように（1990, p.138）、データを整理しても、実際にはデータが少なくなることはなく、むしろ、より多くのデータを生み出してしまう。データの整理はコード化のためだけの言葉を増やすことではないのである。

システムを構築する

全体の内容を理解することで、より体系的な手法、つまり体系性と一貫性を有する手法が保証される。それは1つの手法が、より生産的だと見なされる他の手法に置き換えられるということの意味する。どのような手法がデータの分析に用いられようと、その手法は一貫してすべてのデータに用いられなくてはならない。分析の手法を変える場合には、既に分析が終わっているデータもすべて新しい方法で分析をやり直す必要がある。分析の方向性の変化から、監査可能なメモ的な記録がなされることもある。

体系的な手法でデータに取り組むために有用だと考えられる方法はいくつかある。それにより意味のないコード化を避け、研究者が積極的にデータ分析を行ない、そして、分析のプロセスを進めていく。こういったアプローチの強みは、研究者を「生」のデータに振り返らせ、それを何度も繰り返し読ませることでデータに集中させ、データから意識を逸らせないということだ。

事実を引き出す

1つの実践的な手法として、研究参加者のストーリーを文脈に当てはめたり、仮説を一般化したり、あるいは、結論を引き出しその結論の妥当性を証明する、といった目標に重要だと思われるすべての事実をインタビューから引き出すことがある。ここで言う「事実」とは、推論の誤りや、その内容についての合意の欠如などに最も影響を受けにくいデータの要素と定義される。つまり、誰にとっても自明と思われる事実のことを言う。この手法は、特に、インタビューデータの言語分析に慣れていない初学者に向いている。

一例を挙げてみよう。私は以前、妊娠中に胎児の障害を診断されたカップルについて研究を行なった。その際に私は、どのような種類の出生前検査によりその障害が明らかになったのか、妊娠期のどの時点で最初に障害の可能性について知ったのか、その結果、中絶をしたか、妊娠を継続することにしたのかといった「事実に基づく」情報を取り出した。私はそれぞれの男女（すなわち、各ケース）のイベントストーリーを作成し、他の事実とともに時間の流れに沿って並べた。そして、これらの事実をデータマトリックス (Miles & Huberman, 1994) に表わし、いろいろと違った形で組み合わせてみた。

目に見える形であれ、頭の中であれ、こういった作業を通じて、収集したデータを研究者が「視る (look at)」ことになり、それゆえ、ケース内、そしてケース間に示唆的なパターンや関係性が見えてくる。そのことは、次に生データに戻っていくときに、何を「探す (look for)」べきかという点に研究者の注意を向かわせる、明晰で分析的な方向へと導く。事実に基づくデータを抽出し、それを整理 (再整理) することで、研究者が追究し、データを分割しコード化する努力を意味あるものとする理論的方向性が生み出される。少なくとも、この作業を通して、研究者が、サンプルを記述し、研究参加者の語り全体の文脈を保ち、そして、個々のデータと全体との関係を見失わないために役

立つ情報を取り出すことになろう。

ストーリーライン、トピック、内容

初期段階で、データを体系的に処理するもう1つの方法として、考察されているトピック領域もしくはストーリーラインを、可能な限り簡単な言葉で示すことがある。例えば、先に述べた出生前診断の研究で調査した男女は、胎児の異常をどのように見出したか、そして、その後に彼らがどのような行動をとったかについて語ってくれた(2つの主なストーリーライン)。こういったトピックを特定した後で、研究者は個々のトピックに戻り、さらにトピックの情報内容を多面的に分析する。例えば、「発見」というトピックには、見出すために用いられた方法、見出されたもの、見出すためにかかった時間、見出すことの意味などについての情報が含まれる。研究者は自分自身がトピックをつくったのか、あるいは研究参加者によってつくられたのかを明示することで、トピックの情報内容を超えていくことができ、また、インタビューに現われてくるトピックの順序を記しておくこともできる。

考え方としては、ストーリーラインやトピックリストはできるだけ量を少なくしながらも、そのデータに現れるすべてのトピックを網羅しておくことが重要である。研究者はこういったトピックを識別する作業と、その内容を多面的に分析する作業とを分けておく必要がある(Tesch, 1990)。さらに、1つのトピック領域を多面的に分析する作業と、他のトピック領域をそれぞれ多面的に分析する作業を区別し、また、トピックの中身を分析する作業とインタビューによくある散漫な要素の部分とを区別しなければならない。しかしこういった区別をしながらも、思い浮かんだアイディアは、たとえ作業と直接関係がなさそうなものでも書きとめておかねばならない。そういったアイディアは、後になってその作業に重要な意味をもってくる可能性があるからだ。

1つの作業を繰り返し行っていると疲れてくるものである。その疲れを解消するために、1つの作業に集中しながら、自分の作業の内容を変えてみたり(例えば、トピックを明示してみたり、その情報内容の多面的分析を試みたりする)、もしくは、作業する部分を変えてみてはどうだろう(例えば、1つのインタビューですべての予備的な分析作業を完了するか、あるいは、すべてのインタビューを通してその作業の一部を完了する)。作業の内容を変えるこ

とで研究者は新たな気づきを得ることもあり、また、最初の作業を行なう方法を変えたいくなることもある。ここで注意すべき点は、研究者は一時的に中断した作業がどのようなものであれ、それを継続するにしても、新しいものに変えとしても、十分に明確なガイドラインを維持し、すべてのデータの扱いに一貫性をもたせるということである。

データ整理の枠組み

さらに、初期段階で、より体系的な方法でデータに向かう方法として、データを組織化する方法をあらかじめ指示するような何らかの推測的な枠組みを用いることがある (Miles & Huberman, 1990; Patton, 1990; Tesch, 1990)。データを得るためによく構成されたインタビューガイドを用いることで、そのガイドにある質問項目やトピックが最初の組織化の枠組みとして使えることがある。データは、インタビュアーによってなされたそれぞれの質問への回答、もしくはトピック領域への対応によって分けられる。このような研究は推論的な理論的枠組みに基づくことが多いので、この枠組みのキーコンセプトもまたデータ分析の組織化への枠組みとして使うことができる。ターゲットとなる現象のある見方に対して推測的な関わりをもたないことを目的とした研究では、データに適合し、データをまとめることを可能にする枠組みは、いかなるものでも有用であろう。例えば、構造・プロセス・結果、あるいは、出来事・先行の出来事・結果・条件として知られる枠組みのようなものである。

ここで注意しておくべき点は、分析の準備段階で選択された枠組みはデータをより使いやすい形にするためだけに使われるということである。つまり、研究者が新しい方法ですべてのデータを見ることができるような形である。帰納的手法を用いた質的研究では、分析のためのいかなる枠組みも、究極的にはデータから得られる。つまり、研究で用いる分析枠組みはデータと適合し、データに忠実でなければならない (Sandelowski, 1993; cf. Key Question 10)。しかしここには、最初の枠組みに固執するあまり、データを組織化し、問題点を明らかにするためのより適切な方法を考える可能性を遮断してしまうといった危険がたねに存在する。

■ 結論 ■

質的分析には、いわゆるサイエンスとアートの2つの側面がある。他の研究者にも確実に理解される理路整然とした体系的な研究アプローチを重視し、それを、研究成果が科学的に通用するものとして認められるための必要不可欠の条件としている点において、質的分析はサイエンスの側面をもっている。一方、遊びの要素が入ること、想像力を用いること、創造性といった点で、質的分析はしばしば理路整然としない、理解が容易ではないアートとしての側面をもっている (May, 1994)。しかし、こういったアートの側面は、質的分析での発見が新たな知見を与えるものと考えられるためには、必要不可欠の要素だと考えられている。

本稿では、データの処理に取りかかるための最初のステップについてその概略を示してみた。より深いデータの分析段階へと入り、さらにそこから次の解釈の段階へと移るには専門的な訓練が要求される。と同時に、そこには想像力も必要である。ここに示したステップによって確固とした足場が与えられ、そこから上手く想像の翼を飛ばたかせることができたと願っている。

文献

- May, K.A. (1994). Abstract knowing: The case for magic in method. In J.M. Morse (Ed.), *Critical issues in qualitative research methods* (pp. 10-21). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Miles, M.B., & Huberman, A.M. (1984). *Qualitative data analysis: A sourcebook of new methods*. Beverly Hills, CA: Sage.
- Miles, M.B., & Huberman, A.M. (1994). *Qualitative data analysis: An expanded sourcebook* (2nd ed.). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Mills, C.W. (1959/1978). *The sociological imagination*. London: Oxford University Press.
- Patton, M.Q. (1990). *Qualitative evaluation and research* (2nd ed.). Newbury Park, CA: Sage.
- Sandelowski, M. (1993). Theory unmasked: The uses and guises of theory in qualitative research. *Research in Nursing & Health*, 16, 213-218.
- Sandelowski, M. (1994). Notes on transcription. *Research in Nursing & Health*, 17, 311-314.
- Strauss, A., & Corbin, J. (1990). *Basics of qualitative research: Grounded theory procedures and techniques*. Newbury Park, CA: Sage.
- Tesch, R. (1990). *Qualitative research: Analysis types and software tools*. New York: Falmer Press.
- Van Manen, M. (1990). *Researching lived experience: Human science for an action sensitive pedagogy*. Albany: State University of New York Press.

論文の解説

この論文でサンデロウスキー先生は、質的研究には、データの収集、準備、分析、そして解釈というプロセスが存在すると述べています。そして、この研究プロセスの同時性や反復性、創発的な性質が、量的研究の固定した連続的で直線的なプロセスとは対照的に、質的研究を特徴づけるものだと指摘しています。

「分析」と「解釈」ははっきりとは区別しにくい、時間的にも概念的にも重なり合うプロセスです。例えば、分析の枠組みが解釈のベースとなることはよくあることです。しかし質的研究のよい結果とは何かを理解するには、「分析」と「解釈」という、似て非なる2つのプロセスの違いを明晰に意識することが決定的に重要な意味をもつ、とサンデロウスキー先生は言います。すなわち、まだ「分析」の段階にある未完成の結果と、完全に「解釈」の段階まで終了した結果とを見分ける目をもつということです。

「分析」は、データを基本要素に分解することによって、研究者が収集したデータを「視る (look at: 注意を向けてよく見る)」段階です。この段階は、その後続く「解釈」の段階において、研究者がそのデータの中に何を「探す (look for: 求めて見る)」かを判断するために不可欠なプロセスです。実際、質的研究でよい結果を生み出すには、「解釈」の段階でデータから何を見出すかにかかっていますが、よい「解釈」を生み出すには、研究者がデータを新しい視点から見るができるように「分析」という体系的な手法でデータに取り組むことが必要なのです。

「分析」というデータを分けていく段階では、目に見える形にデータを書き並べることもあれば、頭の中だけでデータを並べて見ることもあります。どの方法をとるにしても研究者がデータを「視る」ことには変わりありません。このようにデータを「注意を向けてよく見る」作業を行なうことによって、データやケースの内部に、あるいはケースとケースの間に、何らかの興味深いパターンや関係性が見えて来ることがあります。このパターンや

関係性は、研究者が再び生（なま）のデータに戻って読んだときに、何を「探す」かを指し示す役割を果たすのです。

一方、「解釈」とは、データから何か新しいものを考えだし、つくり上げていく作業です。「解釈」の結果として得られた知は、分析の最終結果として“生み出された知”です。質的な解釈は、身近なものをさらに身近にしたり、身近なものを見なれないものにしたたり、隠されていたものを暴くことによって、自分のことのように感じる体験（追体験）を読者に与えます。「分析」によって研究者がデータを新しい視点から見えることに成功したなら、「解釈」によって研究者は読者が新しい方法で現象を見ることができると創出していることになるでしょう。

この「分析」と「解釈」の違いをはっきりと理解しておくことは、研究論文を読んだり書いたりする際に私たちに重要な気づきを提供することでしょう。例えばグラウンデッド・セオリーを標榜する研究で、カテゴリーとサブカテゴリーの説明を列記しているだけの論文を目にすることがありますが、実はその研究はまだ「分析」の段階にあり、「解釈」の段階までに至っていないのだとサンデロウスキー先生は指摘します。グラウンデッド・セオリーによって生みだされる理論が、シンボル（象徴）の交換による人々の相互作用の「解釈」の産物だとするなら、「分析」によって項目をつくり出しただけの作業は確かに未完成の状態であると言わざるを得ないでしょう。

いま皆さんが読んだサンデロウスキー先生の論文の後半部分には、質的データの「分析」の流れが具体的に説明されています。質的データ分析では、「全体の意味をつかむ」ことから始まり、いくつかの体系的な手法（「事実を引き出す」、「ストーリーライン、トピック、内容」、「データ整理の枠組み」）のいずれか、またはすべてが使われます。いずれも実践的で重要な内容であり、私たちが現在取り組んでいる研究にも応用できる手法がこの中にあると思います。関心のある手法について、本文に引用されている文献を入手し、その手法をより詳しく把握することをお勧めします。

ところで、これらの取り組みは何のために行なわれているのでしょうか？サンデロウスキー先生は、「データをより使いやすい形にするためだけに使われる」と断言します。つまり、「研究者が、新しい方法ですべてのデータ

を見ることができる」ようにするための「データの組織化」です。帰納的手法を用いる質的研究では、分析のためのいかなる枠組みも、データと適合し、データに忠実でなければならないというサンデロウスキー先生の指摘は特に重要です。質的分析ではデータの収集と分析とが交互に進んでいくので、分析を始める前や分析を始めて間もない時期に想定していた分析の枠組みが、研究プロセスが進んでくるうちに役に立たなくなってくることがよくあります。にもかかわらず、“せっかく枠組みを考えたのだから”と最初に想定した枠組みに固執してしまうことは、より適切で問題点を明らかにする「データの組織化」のありようを考える可能性を閉ざす危険をはらんでいます。質的研究者には、一度手にしたものを、しかるべきときに喜んで手放せる知的な奔放さが求められているのです。

ただしその際、新たに採用する分析の手法は、すべてのデータに用いられなければなりません。つまり、全データの1/2は手法Aで分析し、途中で別の手法Bを思いついたので、残り1/2のデータは手法Bで分析するというやり方は望ましくありません。既に分析が終了したデータも、すべて新しい方法で分析をやり直す必要があることに注意しましょう。

質的研究者に向けてサンデロウスキー先生が繰り返し警告を発していること、それは、既成のルール通りに処理してしまうマニュアル化した思考活動です。なぜマニュアル化した思考活動が深刻な問題なのかと言えば、それは研究者が自分の頭で考えようとしなくなるためです。価値ある質的研究の結果は人間の深い洞察や着想の技能によって生み出されるのであり、この技能こそが人間による知的分析とコンピュータソフトによる分類作業とを区別するものなのです。

研究者のオリジナルな発想は、質的データの「解釈」の段階だけに生じるわけではありません。それはデータ収集の段階から始まり、研究目的に即してデータを組織化していく「分析」の段階にも表われます。よい結果を導く質的分析は、体系的なアプローチを重視する「サイエンスの側面」と、質的研究者の創造性や想像性を重視する「アートの側面」の2つの側面を併せもっているのです。